

ササの名前にまつわる話

錦織 正智

ネマガリタケとチシマザサ

北海道で“タケノコ”といえば、“ネマガリタケ(写真 1)”のタケノコが思い浮かびます。北海道特用林産統計をみると、現在、北海道で産するネマガリタケのタケノコは年間100トン以上が食用に利用されています。タケノコを漢字で書くと、竹冠の脚に旬として“筍”。漢字“筍”は古書にある「旬内に竹の子となりて、旬外に竹となる」が誕生の由来という一説があります。旬(じゅん)は“1か月を3分したそれぞれの10日間を意味することから、タケノコの成長は早く、収穫期間が短いことを言い表しているとする説です。



写真-1 チシマザサ(ネマガリタケ)

さて、ネマガリタケの名前は地表の近くで稈(かん)が曲がっていることに由来し、漢字では“根曲竹”と書きます。本州にも分布するネマガ

リタケには、地方によってさまざまな名前があります。そのなかでもアズマタケノコやヒメタケノコの呼び方は、その地域でネマガリタケを食用として認識していることが想像できます。方言ともいえる地域での植物名は、それぞれの地方での生活と植物との関係を反映した慣用名です。人と植物との関係は多種多様であることから、ひとつの植物に複数の慣用名があることは珍しくはありません。

植物には慣用名のほかに正式な名前(学名)がつけられています。植物分類学を背景とする学名は万国共通の規則(国際植物命名規約)に従って名づけられ、ラテン語を使って“属名+種小名”で表されます。日本では、ひとつの植物にいくつもの名前(慣用名)がついている混乱を解決するために、植物分類学が導入された以降、ひとつの学名に対してひとつの日本語の名前がつけられました。この日本国内で統一した名前を標準和名といいます。

北海道でネマガリタケと呼ぶササに標準和名チシマザサが命名されたのは1901年です。学名は千島列島(英名: Kurile Islands)産の植物標本から名付けられたことに由来して、*Sasa kurilensis* (Ruprecht) Makino et Shibataとされました。ラテン語で表記された学名を解いてみると、“Sasa”はササ属を表す属名、“kurilensis”は千島で見つかったことに由来してつけられた種小名。括弧内のRuprechtは、最初にチシマザサに学名を命名して学術的に発表したロシア人Ruprecht氏の名前。最後のMakino et Shibataは、命名者である東京大学植物学教室の牧野富太郎博士と柴田桂太博士の名前です。“et”は、英語のandと同じ意味です。チシマザサの学名に原発表者名と命名者が並ぶことには、植物分類学における歴史的な背景があります。

日本の植物分類の創世期において、日本のタケとササは外国人学者によってタケ属*Bambusa*とメダケ属*Arundinaria*の下に分類されました。この時代の1850年にRuprecht氏がチシマザサを*Arundinaria kurilensis* Ruprechtと名付けました。この学名は“Ruprecht氏が命名した千島(kurilensis)のメダケ属(*Arundinaria*)の植物”を意味するものでした。その後、牧野博士と柴田博士は分類項目にササ属*Sasa*を創設され、過去に外国人学者が分類したササを改めて見直されまし

た。そして、チシマザサをメダケ属からササ属に改めることを1901年に発表されました。この時、国際植物命名規約に従って、原発表者（Ruprecht氏）と命名者（牧野博士と柴田博士）の名前が並ぶ現在の学名になりました。

チシマザサとミクラザサ

チシマザサは、ササ属のなかでも最も北に分布するササです。樺太・千島を北限として、南は朝鮮半島まで分布しています。北海道での主な自生域は高地の多雪地帯です。また本州で“チシマザサ ブナ群”といえは日本海側気候帯を代表する森林植生です。この“寒さ”と結びつきが強いチシマザサに新たなニュースがあったのは1985年のことでした。

それは伊豆諸島の御蔵島（みくらじま）が舞台です。御蔵島は本州から南に約200km離れた島です。溶岩ドームでできた島の姿はこどもがお絵かきで描くお椀を伏せたようなかわいい形で、島の中央に標高851mの御山（おやま）があります。“原始的な植生が残存する”と形容される島には、低地から高地の間に亜熱帯植物から亜高山植物が垂直分布しており、固有の植物が多く報告されています。

御山の山頂付近に自生するササがチシマザサと極めて類似していることから、チシマザサと近縁であると学会誌に報告されたのが1985年でした。和名はミクラザサと名付けられ、学名は *Sasa kurilensis* (Ruprecht) Makino et Shibata var. *jotanii* Ke.Inoue et Tanimoto とされました。この学名は、谷本氏と井上氏“Ke.Inoue et Tanimoto”が命名したチシマザサの変種“var”を意味します。

チシマザサは寒い地域や日本海側に分布していることから、太平洋の黒潮本流に浮かぶ御蔵島にチシマザサの仲間が成育していることは、驚きある報告でした。また、ミクラザサは滋賀県伊吹山や伊豆半島などに分布するイブキザサ (*Sasa tsuboiana* Makino) とする別の説も唱えられました。イブキザサの命名者でもある牧野博士の著された“日本植物総覧（春陽堂、1931年）”を開いてみると、短く説明されたイブキザサの特徴のなかに“花穂はミヤコザサの如し”と書かれています。ミヤコザサの花穂（写真 2）と似ているのか？ 毎年のように花が咲かないササでは、ミクラザサがチシマザサとイブキザサとどちらの仲間なのか？ 植物分類学上の疑問が続きました。

この疑問に答えたのは、宇都宮大学農学部の小林幹生教授でした。1997年春に御蔵島で起きたミクラザサの一斉開花と結実から、花や穎果（えいか）の形態を詳細に観察した結果、近縁と考えられていたチシマザサとイブキザサと比較すると、ミクラザサは小穂（しょうすい）の大きさ、鱗被（りんび）、包穎（ほうえい）、外穎（がいえい）及び穎果の長さが飛び離れて大きいことから、ミクラザサはチシマザサやイブキザサの近縁種ではなく独立した“種”として扱うのが妥当であると結論されました。このことから、ミクラザサの学名は最初につけられたチシマザサの変種を意味する学名 *Sasa kurilensis* (Ruprecht) Makino et Shibata var. *jotanii* Ke.Inoue et Tanimoto から改められて、新しい学名 *Sasa jotanii* (Ke.Inoue et Tanimoto) M.Kobayashi が命名されました。チシマザサが原発表者名と命名者名が並ぶ学名であったように、ミクラザサも同じように名づけられました。



写真－2 ミヤコザサの花穂

ササの学名が変わる訳

前述に例で挙げたように、ササの学名には原発表者と命名者の名前が並ぶ表記が多く、これらが現行の学名に至るまで幾多の変遷を重ねたことが分かります。このようにササの学名に改名が多い訳は、分類（同定）する上で扱いが非常に困難な植物であることがひとつの理由です。

植物を分類するとき、花（生殖器官）と葉や稈など（栄養器官）の特徴から総合的に判断することが理想ですが、ササ類は毎年開花しないことから、分類は主に栄養器官の特徴（形質）に基づいておこなわれます。“種”以下のレベルでの分類では栄養器官の形質の仔細な違いを見極めますが、ササ類では分類の指標となる形質が安定していません。例えば、葉の裏にある毛は分類する上で重要な形質のひとつですが、同じ稈から出ている葉であるのに、稈の上と下では毛の量が異なっていたり、地下茎でつながっているはずの隣り合った稈の間でもそれぞれの葉に違いがあったり、また季節によっても毛の量は変化します。このようにササでは分類の指標となる形質に変異が大きく、また不安定であることから、識別が容易ではありません。またササは精力的に分類が進められた結果、分類の項目が複雑化していることに加えて、研究者の間でも分類方法に意見が統一されていないことから、分類体系も錯綜しています。このことから、目前のササの学名（標準和名）を言い当てることは、大変難しいことといえます。

北海道で用いられるササの分類方法

日本に自生するササ類は6属（ササ属、アズマザサ属、ヤダケ属、スズダケ属、メダケ属、カンチク属）あり、このなかで北海道にはササ属とスズダケ属が自生しています。スズダケ属は北海道の太平洋側の限られた地域にしか分布しないことから、北海道に自生する大半はササ属のササといえます。

北海道においてササは古くから無視することができない植物でした。北海道開拓の歴史には、開拓者がササを焼き払い、根を一鍬一鍬掘り起こした苦勞が記録されています。今昔ともに、林業では地ごしらえや苗木の成長に最も邪魔な存在です。一方、利用する歴史も古くからはじまり、たらこや塩サバを樽詰して輸送するときに、チシマザサの葉を樽の上下に敷き詰めて防腐に利用する習慣も生まれました。この名残は今も贈答品の海産加工品の化粧飾りに見ることができます。このような生活や産業に根ざした視点から、自然に生えるササを認識・把握する場面では、標準和名（学名）で分類するよりも、むしろ見た目ですぐにわかる容姿の特徴を利用する簡易な分類方法が便利に用いることができます。

このことから、北海道では、林業の視点からササを大型ササ、中型ササ、小型ササと背丈により分類することがありました（表 1）。また北海道大学の伊藤浩司博士が紹介された“チシマザサ”、“クマイザサ”、“ミヤコザサ”、“スズダケ”の4つに大別する方法は、今も広く用いられ、その内容は次のとおりです。

表-1 北海道における自生ササの区分

| 植物分類学による区分 | | 慣用名での区分 | 大きさでの区分 |
|------------|-------|---------|--------------|
| 属 | 節 | | |
| ササ | チシマザサ | チシマザサ | 大型ササ（稈長2m以上） |
| | クマイザサ | クマイザサ | 中型ササ（稈長1-2m） |
| | ミヤコザサ | ミヤコザサ | 小型ササ（稈長1m以下） |
| スズダケ | | スズダケ | 中型ササ |

植物の学名は“属名+種小名”で表されます。これは、植物の分類体系である「門」、「綱」、「目」、「科」、「族」、「属」、「節」、「種」、「変種」、「品種」のうち、“属”と“種”を組み合わせたものです。しかし、ササは“種”レベル以下で細分すると識別が容易ではないことから、“種”よりもひとランク上の大きな単位の“節”に基づいて、チシマザサ節、クマザサ節、ミヤコザサ節、スズタケ節のそれぞれに含まれる複数の“種”を総称して“チシマザサ”、“クマイザサ”、“ミヤコザサ”、“スズタケ”と呼びます。“節”レベルの分類は①稈の高さ、②枝別れの位置・花穂をつけた稈の出る位置、③節間（稈のフシとフシの間の長さ）が基準になるので、比較的容易に識別することができると共に、分類学的にも意味のある方法です。

北海道のササに理解を深めるために

北海道に広く自生するササは、昔から厄介な存在であり、また今も生活に欠かすことができない功罪相償う存在です。そして、以前から本道の豊富な生物資源としても注視され続けてきました。1962年時の調査データからササの資源量を推計すると、生重で15,000万トンになります。これは本道の林木蓄積53,200万 m^3 （乾重換算27,100万トン）の28%に相当する軽視できない資源量であることに、今改めて注目されています。このことから、現在、エネルギー資源としての高度な利用技術の開発がおこなわれています。他方、自然環境の変化に呼応するように、これまで繁茂していた場面で衰退したり、今まで成育していなかった湿原や高山地帯へ繁茂を広げたり、ササは植生の変化においても注目されています。

現在、バイオマスの利用と生物多様性の保護は社会的な要請となり、道内に豊富に自生するササへの理解を今以上に深めることは今後の重要な課題です。ササの利用と理解を進めるには、資源量の把握を簡易な分類方法でおこない、あわせて植物分類学的手法でも整理を進めることが必要です。この過程をとおして北海道のササに新種や学名が変わるような発見があるかも知れません。2008年春は北海道に最も広く分布するクマイザサの開花が比較的多い年であり、先のミクラザサと同様にクマイザサにおいても花穂を比較する機会がありました（写真 3）。写真の花穂は、クマイザサの容姿（栄養器官の特徴）を持つササから採取したのですが、花の量や形、色など、多くの点で異なっていました。これらが同じ種なのか？ 異なる種なのか？ この答えも今後の課題です。

さらに詳しく知りたい方は、以下の資料をご覧ください。



写真-3 クマイザサの花穂

- (1) 伊藤浩司 (1969) 笹 さつぼろ林友, 138号 ~144号
- (2) 井上賢治・谷本丈夫 (1985) 伊豆諸島産ミクラザサについて. 植物研究雑誌, 60 (8) : 249
250
- (3) 小林幹夫 (2000) ミクラザサ (イネ科: タケ亜科) の花の形態と種ランクへの変更, 植物研究
雑誌, 75 (4) : 241 247
- (4) 豊岡 洪 (1983) バイオマス資源としての北海道のササ, Bamboo Journal, 1 : 22 24
- (5) 速水昭彦 (1985) 日本農芸化学会ABCシリーズ③ バイオマス , 生物資源の高度利用, 日本
農芸化学会編, 13 14
- (6) 牧野富太郎 (1931) 日本植物総覧, 春陽堂, 東京
- (7) 北海道林務部森林企画課 (1962) 北海道ササ資源調査概要